

## 叔母とUFOキャッチャー

植松成美

わたしの叔母は毎日ゲームセンターに通い、一日中UFOキャッチャーに明け暮れた。自分の手で獲得したぬいぐるみを眺めるのが、唯一の趣味だった。

くまやうさぎのよく知らないキャラクターのぬいぐるみチャームを集めては、海の見えるベッド横の窓際に並べる行為は、叔母にとって儀式のようなものだった。誰もがかわいいと思うようなキャラクターではなく、原色やネオンカラーの毒々しい色のぬいぐるみが、枕元までずらりと居座っていた。

隣町に大型ショッピングセンターができてから、叔母はUFOキャッチャーを目当てに毎日軽トラを走らせた。山を2つ超えなければならず、片道2時間はかかった。ダブって獲得してしまったぬいぐるみは、盆でも正月でもない平日の夕方にふらりとうちにきて、当時鍵っ子だったわたしにくれた。

私が小学校から帰ってきてランドセルを下ろす頃にチャイムが鳴ると、決まって玄関に立っているのは叔母だった。実の姉妹であるはずなのに、叔母と母は仲が悪く、顔を合わせないようなので、大体家には上がらずに、顔とぬいぐるみのチャームを持った腕だけを扉から見せ、私が受け取るとニヤリと口角を上げて去っていった。

2階の窓に映る海は、今日も変わらない。漁師の夫はいつ帰ってくるかわからないので、いつでも迎えられるように、叔母は基本的には家にいなければならなかった。新婚当初は望遠鏡で夫の船が見えなくなるまで見送っていた。

叔母の髪の毛は赤い。中学生の頃、初恋の先輩に褒められてからずっと、当時と同じ市販のヘアカラーを使っている。一時は廃盤の噂が出たことをネットで知り、その時は真面目に焦っていた。髪の毛だけは中途半端になるのが許せないため、月に一回は根本を染めている。

叔母の住む村は3年前、隣町と統合された。名前上は「市」に変わったが、実際統合されてからの方がよっぽど村っぽくなったと叔母は思う。自分より年上ば

かりが住んでいる村で、叔母に子どもが出来ないのは叔母のせいだということになっていた。それでも叔母はひとり広い厨房に立ち、夫が獲ってきた大小の魚を捌き続けた。

盆は夫の親戚の墓の清掃を任されていた。何度も法事の手続きをこなしてきて、作業はお手のものだった。私もこの墓に入るのだろうかと叔母はなんとなく思っていたが、よく考えると身内では誰もこの作業を引き継いでくれる人はいないのだった。

ある日、叔母はダブルベッドの中で自分が西枕で寝ていたことにふと気がついた。初めてこの家に入った時に窓から見えた、海を反射する光などを思い出して、ひとりで憂鬱な気分になった。

叔母はわたしをゲームセンターに連れていってくれたことがある。母に禁止されていたため、入ったのはその一度だけだ。自動ドアが開く瞬間は、まるで未来でも過去でもない怪物に呑み込まれていくようだった。ガラスケースの中に隔離されたメダルや白い宝石たちは、現実の誰の汗や笑顔より輝いていると思った。鼓膜が破れるほどキラキラした音が、いつもの身体の嫌な部分をかき消してくれる気がした。

「宝箱の中にいるみたいだろう。普段叶えられないことが、ここではできる。自分次第で、欲しいものが手に入る。こっちのもんさ。」

興奮してニヤリと口角を上げる叔母の瞳は、近くで見ると少し青みがかかり、澄んでいて綺麗だった。そんなふうに、その日は一晩中ゲームセンターの中で、叔母と「宝探し」の冒険をしていた。

夜が沈んだような朝、叔母が運転する車の中で、自分で獲ったチャームたちを眺めていた。魔法が解けたって、自分で獲ったマスコットたちだった。その後脳が溶けるほどの睡魔が襲い、タバコの匂いが漂う車内でわたしはようやく眠りについた。

ネオン色のマスコットたちが、スクールバックに吊る下がっている。無限にあると思っていた可能性を捨てる時期が近づき、教室は静かにざわついていた。塾に

寄ってから帰ると言う友達を置いて帰る。通学路にある手芸用品専門店で初めて入り、ある中で一番かわいく小さなハサミを買った。まずは赤いうさぎの腹を切り裂き、わたを丁寧に取り出したあと、いつも使っている筆箱の中にそっと敷き詰めた。